



Data

監督・脚本: タイカ・ワイティティ
 原作: クリスティン・ルーネンズ
 出演: ローマン・グリフィン・ディ
 ビス/トーマシン・マッケン
 ジー/タイカ・ワイティティ
 /サム・ロックウェル/レベ
 ル・ウィルソン/スティーブ
 ン・マーチャント/アルフィ
 ー・アレン/スカーレット・
 ヨハンソン/アーチャー・イェ
 ーツ

👁️👁️ みどころ

「ナチスもの」「ヒトラーもの」の名作は多いが、ここまで徹底して10歳の少年の目からナチス・ドイツを描くとは！タイカ・ワイティティ監督恐るべし。片渕須直監督の大ヒット作は、文字どおり「この世界の片隅」を丁寧に描いたが、本作は更に狭く、ある事情で「ジョジョ・ラビット」と呼ばれ、家の中に閉じこもっている少年と、「壁の住人」たるユダヤ人少女との「ユダヤ人講義」が中盤のメイン。そんな激動(?)の中、ヒトラーユーゲントに憧れ、ヒトラーそっくりの「架空の友人」から励ましを受けていた少年は、いかに変わっていくの？

スカーレット・ヨハンソン扮するママの知性と勇気にも注目しながら、悲惨さの中に極上のユーモアをちりばめた「ナチスもの」を楽しみたい。アカデミー賞では、きっと『パラサイト 半地下の家族』(19年)の好敵手になるだろう。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * —

■□■脚本の妙はバランス！悲惨さの中に極上のユーモアが！■□■

映画の出来の基本は脚本にあり！そう考え生涯面白い脚本書きを目指したのが2012年に100歳で死亡した新藤兼人だ。しかして、脚本の妙は、悲惨さの中にもうまく笑いの要素を取り入れたバランスにある。そのことは第72回カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドール賞を受賞し、第92回アカデミー賞で作品賞他、計6部門にノミネートされたポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)を見ればよくわかる。

私は、「戦後75年」の節目となる2020年の今年、『ヒトラーもの、ホロコーストもの、ナチス映画大全集 - 戦後75年を迎えて - 』を出版するつもりだが、その序章では『チャップリンの独裁者』(40年)を紹介して、「ヒトラー映画」の意義を強調している。そんな私にとって、1月17日に公開された本作は必見！2019年9月15日にトロント国際映画祭で観客賞を受賞したことによって、一躍賞レースのトップランナーになったのが本作で、アカデミー賞作品賞の他、ゴールデングローブ作品賞、主演男優賞にもノミネー

トされている。そして、新聞紙上では、「アカデミー賞大本命!」「最強のヒューマン・エンターテイメント!」の見出しが躍り、「ナチスドイツの時代に人々が見つけた本当の生きる喜びに、全世界が笑い、泣いた。」と紹介されている。

「ヒトラーもの」も「ヒトラー暗殺もの」も、そして「ホロコーストもの」も「アウシュビッツもの」も、シリアスで悲劇的な映画が多いのは当然。あえて言えば、前者の代表が『ヒトラー ～最期の12日間～』(04年)『シネマ8』292頁)だし、後者の代表が『サウルの息子』(15年)『シネマ37』152頁)だ。ちなみに、『アンネの日記』を読んで涙しない読者は世界中どこにもいないはずだ。しかし、映画はエンタメ。したがって、いかに「ヒトラーもの」でも「ホロコーストもの」でも、悲惨なだけでは映画としてはイマイチ。やはり、そこ(その脚本)に笑いの要素が必要だし、全体としても悲慘さとユーモアのバランスが大切だ。そんな視点で考えてみると、『チャップリンの独裁者』にも『ライフ・イズ・ビューティフル』(97年)『シネマ1』48頁)にも、極上のユーモアが含まれていたことがよくわかる。しかして、その両作に並ぶ「極上のユーモアとともに戦時下の真実を描く傑作誕生!」と新聞紙上に見出しされている本作の「極上のユーモア」とは?

本作の脚本を書き、監督したのは、これまで私が全く知らなかったタイカ・ワイティティだ。1975年生まれの彼は、何と本作でジョジョの空想上の友人、アドルフ・ヒトラー役で出演しているから、若き日のチャップリンを彷彿させるスクリーン上での躍動感あふれた彼の演技にも注目!なるほど、こんな友人を持てば、10歳の男の子ジョジョがナチスの信奉者になっても当然かも・・・。

■□■タイトルの意味は?災い転じて・・・?■□■

本作の主人公は10歳の少年ジョジョ(ローマン・グリフィン・デイビス)。新聞でもチラシでも彼の顔が大きく映っているが、そのタイトルは一体ナニ?アカデミー賞で本作と作品賞を争うことになるであろう『パラサイト 半地下の家族』は、タイトルだけで何となく作品のイメージが浮かび上がったが、ポン・ジュノ監督が「ネタバレ厳禁」としていたため、予測不能なストーリー展開とその結末はどこにも流出していないはず。

それに対して本作は、チラシでも新聞紙評でもかなりのところまでネタバレされている。したがって、ジョジョの空想上の友人としてアドルフ・ヒトラーが登場するのが想定範囲内なら、アンネの日記ばりに(?)、自宅の隠し扉の奥でユダヤ人の少女エルサ(トーマシン・マッケンジー)が隠れ住んでいたのも想定範囲内になる。本作はその点で、「想定範囲外」の出来事ばかりが続く『パラサイト 半地下の家族』とは大違いだ、逆に本作のタイトルはいくら考えてもその意味がわからない。しかし、心配はご無用。本作ではジョジョがはじめてナチス・ドイツの青少年集団ヒトラーユエグントの合宿に参加するシーケンスの中で、なぜ彼が「ジョジョ・ラビット」と呼ばれるようになったのかが明らかにされるので、まずはそれを確認したい。

ジョジョは命令通りウサギを殺せなかったため、「ジョジョ・ラビット」と呼ばれ、「父親と同じ臆病者だ」と教官のクレンツェンドルフ大尉（サム・ロックウェル）やミス・ラーム（レベル・ウィルソン）からバカにされたのは大変だが、森の奥へ逃げ出し泣いていた彼の前にアドルフが現れ「ウサギは勇敢で、ずる賢くかつ強い」と激励されたことによって元気を取り戻したからえらい。しかし、その直後に張り切って参加した手榴弾の投てき訓練に失敗したジョジョは大ケガを負ってしまったから大変だ。そんな中、ジョジョのたった一人の家族で勇敢な母親のロージー（スカーレット・ヨハンソン）がユージェントの事務局に抗議に行ったことによって、ジョジョはケガが完治するまではクレンツェンドルフ大尉の指導の下、身体に無理のない奉仕活動を行うことになったから、ある意味でラッキー。もっとも、親友のヨーキー（アーチャー・イエーツ）と同じように、ヒトラーユージェントの隊員として活躍できなくなったのは残念だが、さて、ジョジョの今後の活躍は如何に？果たして、ジョジョは大ケガとヒトラーユージェントに参加できない現状を「災い転じて・・・」とすることができるのだろうか？

■□■ビートルズにビックリ！美少女の登場にもビックリ！■□■

ビートルズが日本にやってきたのは1966年6月、私が高校3年生の時だ。彼らのヒット曲『抱きしめたい』は1963年1月に発表した5枚目のシングル曲だが、何と本作のオープニングシーンでそれが大音量で流れてきたから、私はビックリ！イギリスは『ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男』（17年）『シネマ 41』26頁）、『チャーチル ノルマンディーの決断』（17年）『シネマ 42』115頁）等で見たように、フランスがナチスに占領された後、もっとも我慢強くナチス・ドイツと戦い、トコトン抵抗した国。それなのに、イギリスのリバプール出身のビートルズが、何とドイツ語で『抱きしめたい』を歌っていたから、私はさらにビックリ！

他方、『パラサイト 半地下の家族』では、半地下住宅に住む4人家族が、高台にある4人家族の大邸宅にパラサイトする導入部のストーリーの後には、あっと驚く想定外の展開が次々と続いたが、本作でジョジョがあっと驚く想定外の展開は、大ケガのため外に出られず、家の中での孤独な生活を余儀なくされていた彼がある日、亡くなった姉のインゲの部屋で隠し扉を発見したうえ、その中にユダヤ人の少女エルサを発見したことだ。10歳とはいえ、ヒトラーの信奉者であり、また、ヒトラーユージェントの活動に参加できていないとはいえ、思想的には立派なヒトラーユージェントの隊員であるジョジョなら、ユダヤ人を家の中に置くことなど絶対にあってはならないことは十分に理解しているのは当然。それなのに、エルサはシャーシャーと「私はロージーに招かれてここに隠れている。」と弁明したから、アレレ。まさか、あの母親がそんなことを！？いや、そんなことはありえない。これは何としても通報しなければ・・・！ジョジョがそう考えていると察知した利発なエルサはそこですかさず、「通報すれば？あんたもお母さんも協力者だと言うわ。全員死刑

よ。」と脅したから、さあ、ジョジョはどうするの？

『ライフ・イズ・ビューティフル』では、父親とともに強制収容所に入れられた5歳の息子ジョズエが、父親グイドの「自分たちはゲームに参加しているんだ。」「隠れていると点がもらえる。そして1000点集めたら、戦車がもらえるんだ。だから絶対見つかったらダメだよ！」とのウソを単純に信じたため、その後は涙いっぱい、ユーモアいっぱいのストーリーが進んでいった。それに対して、こんな予測不能な事態の中、10歳の少年ジョジョがパニック状態に陥ったのは仕方ないが、そこでいろいろと考えた彼はエルサに「ユダヤ人の秘密を全部話す」という条件を呑めば住んでいいと持ち掛けたから偉い。その心は、エルサをリサーチすることによって、ユダヤ人を壊滅するための本を書こうと思いついたわけだ。なるほど、なるほど。

ビートルズにビックリ！美少女の登場にもビックリ！だが、悲惨な境遇の中にもにかかわらず、本作中盤にジョジョとエルサの間で展開される“ユダヤ人講義”はユーモアいっぱい、寓話いっぱいの楽しいものだから、それをしっかり味わいたい。

■□■ママの元気さと知性、そしてファッションと色彩に注目■□■

クエンティン・タランティーノ監督の『イングロリアス・バスターズ』(09年)では、ハリウッドを代表する俳優、ブラッド・ピットが反ナチの特殊部隊イングロリアス・バスターズを率いる将校としてヒトラー暗殺の実行犯を演じていた(『シネマ23』17頁)。それと同じように、『マリッジ・ストーリー』(19年)で、タイトルとは正反対の「離婚物語」の中で揺れ動く妻の心理を見事に演じていた、ハリウッドを代表する女優スカーレット・ヨハンソンが、本作では、元気いっぱい、知性いっぱいのジョジョのママ、ロージー役を見事に演じている。しかも、東からはソ連軍が、西からは連合軍がベルリンの攻略を目指して迫っている中での、ロージーのファッションとその色彩はお見事だ。ストーリーの展開を見ている中、ロージーは戦地に行っている父親と同じように、ヒトラーの信奉者としてジョジョの尻を叩いているママだと思っていたが、実はこのママは反ナチ運動の闘士だったから、それにもビックリ！

いくら身の回りに無頓着な男の子でも、10歳にもなれば靴の紐くらいは自分で結べるのが普通だが、どうもジョジョはそれが苦手らしい。そのため、本作では、音楽やダンスが大好きなロージーが息子のジョジョとダンスをしようとするシーン等で、ジョジョの靴紐を直してやるシーンが目につくが、それって一体なぜ？本作中盤でのエルサの登場にはビックリだが、エルサがジョジョに説明したように、それがすべてロージーの計らいによるものであったことがわかると、私はロージーの大胆さにビックリ！『アンネの日記』のアンネは、1942年から44年までは何とか本棚の後ろの秘密の入口から入る部屋で暮らしたが、結局発見され「収容所」へ連行されてしまったが、さて、エルサは？

本作中盤は、前述したジョジョとエルサとの間で展開される“ユダヤ人講義”が楽しい

が、ある日、秘密警察（ゲシュタポ）のディエルツ大尉（スティーブン・マーチャント）が部下を引き連れて、突然ジョジョの家の家宅捜索に訪れる？これはロージーの反ナチ運動が知られたため？それとも、エルサの存在が何者かに通告されたため？

本作はネタバレ厳禁とされていないので、ここで堂々と解説すれば、そんな緊迫した空気の中で、堂々と現れたエルサは、自分はジョジョの亡き姉インゲだと説明。ディエルツ大尉からの質問にもうまく回答し、その場は何とか切り抜けたのは幸い。観客はみんなそう思ったはずだが、そのやり取りに重大なミスがあったから大変。それは、インゲの誕生日を聞かれたエルサが、1929年5月1日と答えたこと。インゲの身分証明書には1929年5月7日と書かれていたから、これはエルサのミスであることは明らかだ。しかるに、ディエルツ大尉は、なぜそれをその場で追及しなかったの？そんな心配をしていると、その数日後、家の外に出たジョジョの目の前には見慣れたママの靴が……。ところが、いつもきちんと結ばれているはずの、その靴の靴紐はきちんと結ばれていなかった。それは一体なぜ？そして、そこでジョジョが目当たりした悲劇とは？

■□■なぜ少年の目でナチスを？監督の出自は？原作は？■□■

ヒトラーは1945年4月30日に総統官邸地下要塞の中で拳銃自殺によって死亡したが、その最後は、『ヒトラー ～最期の12日間～』で詳しく描かれている。もちろん、連合軍やソ連軍が総統官邸を襲うについては、激しいベルリンの市街戦を経たわけだが、「ヒトラーが自殺した」とのうわさ(?)が流れる中、本作ラストではジョジョが住んでいる街でも激しい市街戦が行われ、ジョジョはクレンツェンドルフ大尉や親友のヨーキーたちが、その戦闘に従事する姿を目撃することになる。しかし、そこで本作が面白いのは、『ヒトラー ～最期の12日間～』は史実に基づき大人の目から「ヒトラー最期の日」を描いたのに対し、本作はあくまで10歳の少年ジョジョの目からナチス・ドイツの最後を描いていることだ。ちなみに、私は本作ではスカーレット・ヨハンソン扮するロージーの知性や勇気のみならず、色彩豊かなファッションの面白さを指摘したが、それもジョジョの目を通して見たママなればこそだ。片渕須直監督の大ヒット作『この世界の片隅に』(16年)『シネマ 39』(41頁)では、主人公の北條すずはもとより、その母親たちはみんな黒っぽいもんぺ姿だったのは当然で、本作のロージーのような色鮮やかなファッションはあり得なかった。しかし、タイカ・ワイティティ監督は、なぜそんな風に徹底して、ジョジョの目からナチス・ドイツを描いたの？

本作の原作になったのは、世界22か国で翻訳された国際的ベストセラーであるクリスティン・ルーネンズの『Caging Skies』。パンフレットにある Production Notes によれば、2004年に出版された同作を、母親に薦められて読んだタイカ・ワイティティ監督は、「自分のスタイルを持ち込んで、この小説を映画化したいと思った。もっとファンタジーとユーモアを入れて、ドラマと風刺の群舞のような作品を創り出そうと考えた」そうだ。同監

督の出自は少し複雑で、父親がニュージーランドの先住民であるマオリ、母親がロシア系ユダヤ人。彼の祖父はロシア軍の兵士としてナチスと戦ってきたという個人史的な背景があるらしい。そのことは、宇野維正氏の「コメディアン、役者、脚本家、そして監督。ワイティティの多才さと繊細さが結実」と題するコラムで詳しく書かれているが、本作でここまで徹底してジョジョ少年の目からナチス・ドイツを描いた理由については、このような彼の出自が影響していることは明らかだ。しかし、本作導入部では、あれほどヒトラーユーゲントに憧れていた少年ジョジョの心境は、ナチス・ドイツ敗北の日を迎えようとしている今、どのように変化しているのだろうか？

■□■この奇跡は映画なればこそ！その醍醐味をタップリと！■□■

本作は「ナチスドイツもの」で「ヒトラー最後の日」を描く映画にもかかわらず、本作にはまともな戦闘シーンは全く登場しない。そればかりか、本作ラストに登場する市街戦(?)では、クレンツェンドルフ大尉やフィンケル(アルフィー・アレン)はかなりおふざけのスタイルで戦闘に参加している。それは、ヨーキーも同様だ。また、本作では、ある日以降スクリーン上に登場しなくなってしまうロージーの明るく行動的だったイメージが強烈だが、その分、後半以降は、いかにも利発そうなエルサの存在感が増してくる。彼女の博識ぶりはユダヤ人特有のものかもしれないが、同時にひざまづいてリルケの詩と共にプロポーズされたという反ナチ活動家のフィアンセがいたことも大きく影響しているのだろう。ユダヤ人の優秀さは今更言うまでもないが、本作中盤のジョジョとエルサとの「ユダヤ人講義」では、ベートーベン、アインシュタイン、バッハ、ガーシュイン、ブラームス、ワグナー、モーツァルト、リルケ、ディートリッヒ等の名前が登場してくるので、それに注目！

しかし、アンネと同じ「壁の住人」であったエルサに、決定的に不足しているのは情報。今ならスマホさえあればどんな情報でも入手可能だが、敗戦間近なドイツの「壁の住人」であるエルサには、市街戦でドイツが勝ったのか否かの情報さえないのが実情。したがって、その戦闘が終わり、ジョジョの姿を見たエルサが、「どちらが勝ったの？」と質問したのは当然だが、それに対するジョジョの答えは意外にも『ライフ・イズ・ビューティフル』では、5歳の息子について「これはゲームだよ」とのウソが面白かったし、『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』(99年)では、「ロシア軍がすぐそこまで来ている」とのウソがストーリー全体を牽引していた(『シネマ1』50頁)が、本作ではなぜジョジョはエルサに対してすぐにバレるようなウソをついたの？もちろん、エルサがアンネと同じ運命にならずに生き延びたのは奇跡であり、映画なればこそその設定。そして、映画なればこそ、そんな寓話のような設定が可能なのだけだ。すると、本作最後にジョジョがエルサについて「小さなウソ」の意味は？そのことを噛みしめながら、ユーモアがいっぱい、寓話がいっぱい詰まった本作の醍醐味をタップリと楽しみたい。 2020(令和2)年1月24日記